

---

# 矢吹とジェイソンの物語

小林 世飛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

矢吹とジェイソンの物語

### 【Nコード】

N4226C

### 【作者名】

小林 世飛

### 【あらすじ】

世の中に不満を抱えている主人公が、ある日同じ考えを持つ少年に出会う。その少年は普通の人とは違い少し異質だった。そして主人公はその少年に興味を持つ…。まだまだ幼い少年達の青い青春と、心の成長を描いた青春ストーリー。

## ブログ

あゝもう、何でこんなに世の中くだらないのかな

恐喝、いじめ、窃盗、暴力…  
くだらねえ

自殺、リストカット、援助交際、暴漢、喧嘩…  
なんだそりゃ

授業崩壊、留年、落第、赤点…  
あゝめんどくせえ

大人は言うよ、狭い世界で生きるから、現代の子供は危ないんだって。

狭い、今ある問題を直視しすぎるから、すぐ危ない方に走るんだってさ。

例えば、さっき言ったリストカット、自殺、援助交際、いじめ…  
あまりに問題を直視しすぎて自分の中で爆発しちゃう。

…でも、狭い世界を見せたのはどこの誰だよ？  
大人が俺達に狭い世界を無理矢理見せてるんだろ

「勉強勉強」

「これじゃあ赤点だぞ」

「お前はそのままじゃ留年だ」

「いい大学・いい高校に行きなさい」

「うじうじするな」

「やられたらやりかえせ」…

なあ…これは誰の言葉？

大人が全て悪いとは言わないよ。  
ただ、大人は無理を言い過ぎてる。

俺達は狭い世界でしか生きられないんだよ。  
それだけでいっぱいなんだよ。  
目の前の問題から目を背けらんないんだよ。

あんたらだって子供のときからそんなに広い世界を見てきたのか？  
俺達はまだ未成年で、未完成なんだよ。  
俺達は俺達のテリトリーでしか生きられない。  
生き方がわからない。

何で大人は…それを忘れた？

## V Sゴリ山最終決戦の巻1

### 佐々木の悲劇

- 佐々木の悲劇 -

「昨日付けで佐々木が学校をやめた。佐々木はこのところずっと学校に来ていなかったが、彼なりに色々考えたみたいでな、昨日付けで学校をやめた」

朝のホームルーム、担任のゴリラのような顔をした熱血教師磯山（通称ゴリ山）が深刻な表情でそう言った。

佐々木というのは半年くらい前からずっと学校に来ていなかった生徒だ。

まあいわゆる登校拒否つてやつ。

「みんな、それぞれ悩みがあるだろ。でもな、それは本当はよく考えるところでも小さいことだ。もっと広い視野で周りを見なさい。そうすると、自分がどうしてこんなに小さなことで悩んでいたのかと、気付くはずだ」

出た。

ゴリ山の口癖

「広い視野で周りを見る」。

もう耳にタコが出来る程この言葉を聞いた。

ついでに言うと、俺はこの言葉が大嫌いだ。

「佐々木にも何度もそう言ったが、やはり狭い世界しか見れなかったみたいだな…。この先どうするのか…。お前らには出来ればそうなって欲しくない。リストカットとか、そういうことに逃げて欲しくない。つらいことがあるなら先生に相談しなさい。いつだって相談に乗る」

ああゝあ、何言ってたんだ、この先生。

根本をわかつちやいない。

佐々木が登校拒否になったきっかけは、あんただったっていうのに…。

俺はたまたまその場に居合わせた。

「もう…嫌だ…。…もう何もかも…嫌だ…。…みんな…みんな…大嫌いだ…」

確か、5時限目が終わった休み時間だった。

俺は小便を催してトイレに行った。

そしたら、まあ…泣きながらトイレにうずくまってる奴を発見した。  
「…佐々木？」

俺が声をかけると、大袈裟なくらいビクツと身体を震わせて、慌てて俺を振り返った。

その顔は泣きじゃくった後みたいな酷い顔だった。

ただ…それだけじゃなくて、顔中にある無数のあざに俺は目がいっぱいだった。

できたばかりのようなその赤いあざ…。

「何してんの？」

遠慮がちに、だがさりげなく俺はそう声をかけた。

「もう…なにもかも…嫌になった…。…もう、うんざりなんだよ…。…春木はいいよ…。いつものほんと生きててさ…。悩みなんか何一つなさそうで…。俺は…もう…嫌なんだよ…。」

そのとき気付いた。

佐々木の手に握られているカッターに。

「なんかあったの？ていうか、その顔…」

そしたら、佐々木は渴いた笑みを浮かべて、力無く言った。

「この顔？…ハハ…ゴリ山にやられた…。俺が反抗するからだって

さ…ハハ……。何でも相談しろって言ったの誰だよ……。あいつ…  
知ってた？…ゲイなんだよ…」

急に何言い出したかと思った。

「はっ!？」

「驚くことじゃないじゃん…。あいつ…女子生徒のことには全く興味ないけど…男子生徒のことになると妙に執着してくるし…。俺も…もっと早くに気付いてればよかった…」

それから俺はまたしてもあることに気付いた。

佐々木の制服が妙な形ではだけているということに…。

「まじかよ…」

「やっと気付いた？…春木も気をつけた方がいいよ…。あいつ本当の変態だからさ…」

佐々木はまた目から涙をポロポロと流し始めた。

俺はあまり気にしすぎちゃいけないと思って、素直に小便をした。

「もう…誰も信用できない……。もう消えちゃいたんだよ…俺…」  
まだ便器にいる俺は振り返りながらそのときこう言った。

「あんな奴のために死ぬのか？…そんなのあいつがゲイだってバラして犯されたことお巡りに言えばいいじゃん」

そしたら、佐々木の奴…キレた。

「そんなの…言える訳ないだろ!!？俺のことなんて誰もかばっちゃくれない!!…そんなこと言ったらみんなのいい笑いのネタだよ!もううんざりなんだよ!!…何もかも!!…」

俺はそのいつもじゃありえない佐々木のキレっぷりに驚きながらも、あれをしまつて佐々木の方に向き直った。

「結局春木だつて人事だよ…。もういいんだ…。俺はもう…全部なかったことにしたいんだよ…」

そう言うと、佐々木は持っていたカッターを手首に押し当てた。

「おいおい、やめろつて」俺は反射的に止めに入ろうとした。

そしたら、ポロポロの顔で佐々木は俺の目を見た。

「春木には止める権利ないだろ」

その瞬間、佐々木の手から血が吹いた。  
深かった。

俺はそれをただ見ていることしかできなくて…

それから教師が沢山男子便に入ってきた。

何気ない顔したゴリ山も、ただ心配してる教師を装いながら入って来た。

それから、佐々木は学校には来なくなった。

俺にとっては、生きているのが奇跡だと思った。

「まあ、佐々木のことは仕方がない。あいつは弱かったんだ。悩みも人に打ち明けられなかった。早くに先生に相談してくれればこんなことにはならなかったはずだ。もっとみんな広い視野で物事を見なきゃ駄目なんだよ。引きこもって何の解決になるっていうんだ？みんなそう思わないか？狭い世界で生きて苦しんで、それで人生終わりなのか？」

2回目…

「もっと広い視野で見る！先生もついてるんだからな。いつもいうように…」

なんだ、これ。

同じことしか言えねえのか、このゴリラ。

もう聞きたくねえよ、お前の話なんて。



そして俺はついに…キレた。

ガターン!!!!

けたたましい音。

机が音をたてて倒れた。

まあ、俺が蹴ったからなんだけど。

あ、前の席の鈴木くん、ごめん、もろに当たったね。

みんなの視線が俺を刺す。勿論1番痛い視線は担任のゴリ山の視線。みんながまるで動物園のライオンでも見ているかのようなだった。

恐ろしさと、好奇心。

俺が次に何をやるのかを期待している目。

俺はすつくと椅子から立ち上がった。

「便所…」

先生の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。

「は？」

「便所…行ってきます」

俺はそのままクルリと向きを変えて、教室の後ろの扉を目指す。  
数秒の沈黙

それからやっと我に返ったゴリ山の怒鳴り声。

「はるきい!!!!」

うるさい。

仕方ないので振り返る。

「何ですか？」

怒りか、生れつきか、顔を真っ赤にしたゴリ山が震えた声で言う。

「机直していけ」

「ああ…」

俺は倒れた机と、それに挟まっている鈴木くんを見て仕方なく席の方に戻ると、何故かゴリ山も俺の席の方に向かってくる。

何故かゴリ山の震えている身体…。握られた拳。

まあなんとなく予想はついていた。

自分の席のところになると、目の前にはゴリ山の醜い顔があった。そして、怒りの鉄拳。

見事に俺の左頬にヒット。そのまま俺は机の壁につっこんだ。

けたたましい音

女子の叫び声

みんなが一斉に俺とゴリ山から距離を置く。

「立てえ！！春木い！！！」

俺は唾を吐いてから立ち上がった。

今度は俺の番。

もう一度飛んでくるゴリ山の怒りの鉄拳を左腕で受け止めて、腹に一発。

屈み込むゴリ山を回し蹴りで投げ飛ばして、ゴリ山の上に乗った。

ええーっと…何発殴ったわけ？

覚えてないや。

まあ俗に言う、キレたってやつ。

佐々木にも見せてやりたかった。醜いゴリ山の顔がどんどんさらに醜く変形していく様を。

それからどうなったかは、みんな想像がついているように勿論停学。教師を殴ったっていうのに、五日間の停学ですんだ。それは、ゴリ

山が先に俺に手を出したから。

まあ…しょうがないよね

## V Sゴリ山最終決戦の巻2

### 矢吹と名乗る男

矢吹と名乗る男

-五日間後

俺は学校に舞い戻った。

久しぶりに見るゴリ山の顔。まだ顔にはあざが残っていた。  
俺を見るゴリ山の目が冷たいのは、まあ仕方ない。

俺はだんだんアホらしくなって、いつも行く俺の部屋に行った。

サボるときはいつもここ。図書室という名の俺の愛部屋。

ガラッ

そうそうこのかんじ。

懐かしいぜ、俺の部屋。

…ん？

何かおかしい。

いつもと何か違う。

俺の部屋に…誰かがいた。振り返ったその顔は、男のくせになんか綺麗だった。太陽を背負って、髪が金に輝いていて…見たことがない顔だった。

「…あんたもサボリ？」

急に声をかけられた。

これもまた、綺麗な声だった。

「…ここ、俺の部屋」

俺は扉のところに立ったまま、そう呟いていた。  
なんか悔しかった。

俺の部屋を取られたからじゃない。

この部屋が、こいつの方が似合っていたからだ。

「あ、そうなんだ。ごめん借りてた」

彼は『俺の部屋』と言ったことを否定せずに、ただそう言って窓の方に向き直った。

ちくしょう、様になってる。

俺は負けず嫌いだから、気にせず中に入った。

そしていつも座っていた場所に腰掛ける。

そこは窓の縁の台。ちよつと離れたところにその男はいる。

出てってくれないかなあ…

「あんたさ…」

綺麗な声が俺に話し掛ける。

「この前ゴリ山殴った人だよね？」

なぜそれを…

思わず男の顔を見た。

さつきは逆光でよく見えなかったけど、今回は近いしよく見える。

予想通り、綺麗なまるで透けるように白い肌、二重の目。整った鼻に薄い唇。

太陽の光で金に輝く綺麗な髪。

嫌になっって目を逸らした。

「何で？」

「俺見てたから。そのとき」

男は言った。小さく微笑んで。

「え？」

聞き返すと、男は綺麗な長い指で窓の外を指差した。そこからちよつど見える3階の俺の教室。  
なるほど

「キレたんだ？」

笑いながらそう聞かれた。俺は素直に答える。

「うん、キレた」

それからしばしの沈黙。

なんで初対面の人と話してんだろ…。だけど、口が勝手に動き出す。  
「ゴリ山の口癖…知ってる？」

「ああ、あれでしょ？『広い視野が』なんとかこんとか」

「そう、それ。俺それが大っ嫌いだよ。何発も連呼するもんだから、溜まってるのが爆発した。あいつの無知さにもいい加減嫌気がさした。全部が重なっちゃって、爆発したみたい」

すると、男は笑った。

八重歯が出ていることに気付く。

「俺もその言葉大嫌いだったな。だからなんだ？っていつも思ってた」

「うん、俺も。広い視野で物事見たって根本は解決しない。目の前の敵とばかり闘って背中を無視したら駄目なのはわかってるけど、俺達はそうやって大人になってくんじゃないのか、って思う。背中に気い回ってなくて背中刺されて、それで『あ、背中も見なきゃならん』って気付くんじゃないのか、ってさ」

そしたら、またしても男は笑った。

「へえ、俺以外にもそんな考える人いたんだ」

俺以外にもってことは…あんたも？

「ねえ、聞いていい？」

男はおもむろにそう言った。

「何？」

すると、男はまた窓の外の俺のクラスを指差した。

「あの時、最初わざと殴られたでしょ？」

おっと、そうきたか。

「何で？」

「だってわざとらしくったから。避けるタイミングは沢山あったでしょ？なのに何一つ身動き取らなかった。それはわざと一発ゴリ山に殴らせといて、あとから罪を軽くするためだったんじゃないの？」  
今度は俺に笑いが込み上げてきた。

「さあね」

こいつ…面白いかも。

「あんた見かけない顔だよな。2年じゃないだろ？」俺がそう聞くと、男は頭を縦に動かした。

「俺、3年。あんたの1個上。でも歳でいうと、2個上」  
ん？ということは…

「ダブってるの？」

男はまた八重歯を出して笑った。

「そ、留年してんの。今年19になるってこと」  
意外だった。

…いや、意外でもないかも。この真面目で型にはまった学校でこんなに明るく髪染めて、こうやってサボってたんだから。

「あ、もしかして問題児？」

俺はニヤリと笑って言った。

2個も年上なのに、この馴れ馴れしさは何だ、俺。

「いや、別にそんなこともないよ。俺普通に卒業できたんだ。でも…急に恐くなってさ。社会の型にはまるのが」

「は？」

何言ってるんだ、この人は。

「俺達って今学校の型にはまってるの。わかる？で、それと同じように社会にも型がある。人間ってなんだかんだ口では自由を求めているけど、本当は自由なんて求めてないんだよ。人間って型にはまっていた生き物なの。学校に通ってないとなんか不安になるとか、会社をやめたら社会から省かれた気がして不安なんの。将来のためだけじゃない。生活するためだけじゃない。俺達は型の中にいないと不安なんだよ。やってけないの。みんな狭い世界で生きてんだよ。偉そうなこと言ってるゴリ山もね。どんなに凄い仕事ができる人よりも、自由を求めて一人旅してる人とか、ホームレスとか、俺はある意味そっちの人のほうが尊敬しちゃうね」

言ってることはなんとなくわかるけど、この人…何者？

「つまり、俺が言いたいのはどうせ型にはまるなら、学校の型には

まっていたかった。社会の型は恐いから…。だから俺わざと留年したわけ」

「何したの？」

すると、恥ずかしげに言った。

「夜の学校に忍び込んだ。」

「ぶはっ」

吹き出した。

やることがぶっ飛びすぎじゃん。

「今思ったら俺も恥ずかしいよ。でも、俺テストの点だってそこそこ良かったし、単位だって足りてた。今更やることといったらそれしか思いつかなかったんだよね。忍び込んで学校中の壁を黒スプレーで塗り潰した」

「よくそれで退学になんなかったな」

「うん、ならなかった。長い停学処分。まあセンサーが反応しちゃって大変なことになったからね。学校中の全部の壁を黒くすることはできなかったんだ。ま、真似する奴が出ないように見せしめってかんじで留年」

「ふーん…」

「ていうか、知らない人も珍しいね」

…言われてみれば。

何で俺は知らないんだろう、こんなビッグニュース。

あ、分かった。

俺そん時学校来てなかったんだ、きっと。

「なんか俺あんたと気合いそう。名前なんて言うの？」

俺がこんなこと人に聞くて珍しいことなんだけど。この男に興味湧いちゃったみたいで。

だってこんな異人、滅多にいないよ。

「名前…名前かあ…じゃあ矢吹で。」

「じゃあって…」

矢吹と名乗ったそいつの目の先には本が1冊。

【海の中の家 矢吹章】

もしかして、こっから取りました？

「本名何て言うんだよ」

すると、矢吹は無表情に窓の外を見た。

「名前なんてなんだっていいじゃん」

ま、確かに。

そう思ってしまう自分が恐い。

「じゃあ俺は…」

そう言っただけで何かないか探した。

すると、壁に日めくりカレンダーがあった。

13日（金）

…これだ。

「じゃあ俺はジェイソンな」

それから俺の部屋は、1人部屋じゃなくなった。

「あ、ゴリ山」

俺達はいつものように図書室という名の俺達の部屋で窓から他の教室を見ていた。

そしたら俺の隣のクラスがちょうどゴリ山の授業。

ま、あいつの受け持つ授業だから、保健だろうな。

「うえ、今日も馴れ馴れしく男子に触りまくり。気持ちわり」



俺は舌を出して、嫌な顔をした。

そしたら矢吹が涼しげな表情で言った。

「仕方ないよ、ゲイなんだもん」

…なぜ知っている

「…え？どつからそんな情報聞いたの？」

「いやいや、聞いた情報じゃなくて、俺が1回そいつ目にあつたからさ。知ってるの」

まじ…？

ここにもいましたゴリ山の被害者。

「うそん」

「本当だつて。ま、やばいなあ〜と思ったから逃げたけど」

矢吹は近くに転がっていたシャーペンを手でクルクル回した。  
佐々木の奴とは大違い。

「じゃあ最後までいかなかったんだ」

そしたら矢吹はまた八重歯を出して笑った。

「いくわけないじゃん。ぶっ飛ばして逃げたよ」

まあ…普通そうするだろうな…。

ひ弱な佐々木にはそんなことすら出来なかったのだろう…。

「ジェイソンこそ。なんか知ってたって面してるけど？」

クルクル回すペンを止めずに、悪戯っぽく矢吹は言った。

痛いところに気付くなこの男。

まあ…言つたところで何もならんか。

「居たんだよ、俺の知り合いにも被害にあつた奴」

「へえ〜」

クルクルクルクル回るペン。

「そいつの場合最後までいっちゃったみたいでさ、そいつ最近学校やめたんだ」

「へえ〜、お気の毒に」

ニヤニヤ笑う矢吹。

クルクル回るペン。

なんか急に不公平に思えてきた。

何も抵抗できない奴。

何事もなかったかのようにペンを回す奴。

心にダメージを受けやすい奴。

ダメージをサラリと受け流す奴。

…そして、全ての元凶…ゴリ山。

いいこと思いついちゃった、俺。

「なあ、ゴリ山に痛い目見せてやろう」

そしたら矢吹の奴、シャーペンをポトリと床に落とした。

「何すんの？」

八重歯を出してニヤリと笑う。

「まあ、俺にまかせとけて」

## V Sゴリ山最終決戦の巻3

### 天罰

#### 天罰

次の日の放課後、矢吹がゴリ山を呼び出した。

そこはあまり人が寄り付かない場所、資料室。

「久しぶりだな、あんな事件を起こしたお前が俺に何の用だ？」

汚い笑みを浮かべたゴリ山。

俺は資料室の扉の外にいて、扉をほんの少し開けて、成り行きを見守る。

矢吹はいわゆる囷って奴。

「先生…。俺、前の続きがしたいんです。前は逃げてしまってますいませんでした。」

迫真の演技とは程遠い、棒読みの言葉。

でも、ゴリ山にはこれで十分みたいだ。

「…いいだろう。前のことは許してやる」

そう言ってジリジリと矢吹に歩み寄る…。

矢吹は話題をふる。

「先生は、俺以外にもこういうことすんの？」

そしたらゴリ山は嬉しそうに笑った。

きつと、矢吹が自分にヤキモチでもやいてるんじゃないか、なんて勘違いしてるんだと思われる。

「まあね、可愛い男の子にならたまーにするわよ。でも、あなたほど綺麗な人はいないわね」

「今までこの学校の奴何人くらいとやったの？」

「…そうね…一人、二人…うゝん、六・七人くらいかしら…」

こらこら、喋り方がカマ口調になってるぞ、ゴリ山。

「そんなことはどうでもいいじゃない。そう焦らさないで」

そう言つて矢吹の体に触れる…。

ヤバイな。

でも、まだ決定的なことがこのままじゃわからない。

「待つて先生。あと一つ聞かせて。先生は、どんな奴がタイプ？俺、先生のタイプの男になるよ」

さっすが、矢吹。やるな。

すると、ゴリ山の手はピタリと止まった。

「そうねえ…物静かで、素直な可愛い子がいいわね。あ、でも少し抵抗してくれた方が萌えるわ。沢山鳴いて、おねだりして欲しいわね。…でも、あなたはこのままで良いわ」

おえっ…きもちわりい…。よく堪えられるな、矢吹の奴。

「さあ、もう焦らさないで」

さて、この辺でもういいでしょうか。

という目で矢吹が扉の隙間から見ている俺に訴えてきた。

もうちょい見たい気もするけど、さすがに矢吹が可哀相なのでここでストップしましょう。

ガラッ

勢いよく扉を開けた。

矢吹に触りまくりのゴリ山。

矢吹に口付けをしようとしているゴリ山。

焦るゴリ山。

俺はまるで強盗が顔を隠すのにするような、両目と口のところだけ開いた袋を頭に被っていた。  
そしてカメラを構える。

パシャッ

明るいフラッシュ。

矢吹とゴリ山が眩しそうな顔をした。

「ごっつおさんでーす!!」

そう言つて次の瞬間走つた。

続いて矢吹も見られたのをわざと恥ずかしがるように、ゴリ山を突き飛ばして、俺とは反対方向に逃げた。

笑いが込み上げてくる。

ゴリ山のあのアホ面見た?ばゝか、いい気味だ。

次の日の昼休みの放送でゴリ山の人生は終わる。

『はい、今日もお昼の放送の時間がやってきました。今日のリクエストは一杯きてますねゝ何から行きましょうか。じゃあ、これ!ポン太さんからのリクエストテープから行きましょう。【これは私の初めて付き合つた時の思い出の曲です。未だに大好きなこの曲、是非お願いします】では、どうぞ』  
そしてポン太さんのリクエストの曲が流れる。

「早く流れねえかな」

俺達は屋上に向かう階段のところに座つて今か今かと期待している放送を待った。

「そんなに焦なくなつて流れるって」

矢吹は紙の束を扇子のようにして扇ぎながら涼しげに言う。

「こんな青春ばい歌聞きたくねえよ」

「じゃあ耳塞げば?」

俺はじつと矢吹を見た。

俺の方をちよつとも見ない。

俺は言われた通りに耳を塞いだ。

そしたらそんな俺を見て、矢吹は何かを言って笑った。

でも、耳を塞いでいる俺には聞こえない。

それから二曲くらいリクエストの曲が流れた。

すると、急に矢吹が俺の手を引つ張り耳から離れた。

「きた？」

俺がそう聞くと、矢吹は八重歯を出して笑った。

『匿名希望さんからのリクエストは』『こんなの聞いたことない！  
みんなにも是非この衝撃的な声を聞いて欲しいです！』うーん、何  
でしょうね、気になります。では、どうぞ！』

俺達は急いで階段を駆け上がり、あらかじめ鍵を開けておいた屋上  
の扉を開けてフェンスに登った。

「ひゃっほー」

俺達は奇声をあげながら、紙を階下へと撒き散らした。

その紙には昨日撮ったゴリ山が写っている。

あの、矢吹をこれから食べようとするゴリ山の姿が。

うまい具合に矢吹の顔は隠して撮ったから、ゴリ山の姿しか写って  
いない。

そして今頃放送では、昨日の資料室での矢吹との会話が流れている  
はずだ。

俺が録音したテープ。

きっと今頃学校中がパニックに違いない。

ゴリ山のカマ口調。

そしてもう六・七人の生徒を食ったという問題発言。

そして気持ち悪いゴリ山の男のタイプ。

いい気味だ。

ちなみにこの録音テープは佐々木のところにも郵送した。  
あのゴリ山の写真も。

そして手紙なんかも入れてみた。

【仇はとつたぞ。遅れてごめんな。      ジェyson & 矢吹】

これを見て、佐々木はどう思うかな…。

これで、佐々木がまた前を見て歩いていけたらいいんだけど。  
佐々木、俺のメッセージ伝わった？

お前の目の前に立ちはだかっている問題の一個。  
たった一個だけど、叩き壊せてやれたかな？

それからゴリ山のことはすごい問題になった。

彼は

「誰かに仕組まれた。こんなことはしていない」と言い出した。  
でも、それからというものの、匿名で被害者が名乗り出たりして、  
生達も真剣にこの問題について話し合いとかを始めたらしい。  
そして気付けば、ゴリ山はこの学校から姿を消していた。

いい気味だ。

でも…少しやり過ぎたかな？

別に俺は、ゲイが駄目だとかそういうことを言いたい訳じゃない。  
ただ、あいつを…懲らしめてやりたかった。

佐々木やそれ以外の被害者達の傷みをわからせてやりたかった。  
飄々として、綺麗事ばかり並べている奴に、本当の現実を見せてや

りたかった。

…ただそれだけ。



## 友達の方程式1

## 俺という存在

### 俺という存在

俺と矢吹はすっかり仲良しになった。

こんなに心から仲良くなれたのって生まれて初めてかもしれない。

俺ってさ、今まで結構仲良くしてた奴とかに、よくこう言われてた。

「お前ってさ、なんつうか…何も考えてないみたい。っーか、軽い」  
とか、

「なんか、悩み事とかお前に相談するの悩むんだよな。お前はいつも悩みがないみたいだし、相談しても何言ってるのかわかんなさそう」

とか、

「冷めてるよなあ」春木って。なんか、よくわかんねえ」

とか…よく言われてた。

でも、そんなこと言われたってどうしたらいいのかわからない。

俺が悩まないだなんて、どうしてお前らにわかるんだよ。

軽いって何？

冷めてるって何？

さっぱりわかんねえよ。

一体俺にどうして欲しい訳？

だから俺は…なんとなく、友達ってもんがよくわからない。

みんな俺をイメージだけで見て、色々言ってくる。

俺が傷付かないとも思ってるのかな？

でも、矢吹は違った。

俺に矢吹は言った。

「俺達って物事深く考えすぎなのかも。損してるよなあ俺達」  
いつもお前、とは言わない。矢吹はいつも俺達、なんだ。

だからホッとする。

俺だけじゃないんだって。

やっぱり人間って型にはまりたがる生き物なんだなあと思った。

型っていうか、枠…？かな。

一人ってつらいよ。

省かれたらキツイよ。

お前は違うよな、人とは違うよな、って俺は今まで言われてきた気がして… 凄く嫌だった。

寂しかった。

何でわかってくれないんだろう？って本気で思ってた。

だから…

自分でも驚くくらい、矢吹との出会いは俺にとってはでかいものだったんだ。

俺は今、珍しく授業を受けている。

いや、そう毎日、毎時間サボってるわけではないけど。

今日は矢吹が学校を休んだ。

… 矢吹がいないって、こんなにつまんなかったっけ？

「なあ」

すると急に後ろの席の奴が身体を前に寄せて俺に話し掛けてきた。  
振り返ると顔が近い。

何だ、こいつ。

「何？」

「最近さ、三年のあの学校黒スプレーで真っ黒にした奴。あいつとつるんでるよな？」

「みんなあの事件のこと知ってんだ。」

実は矢吹ってこの学校の有名人？

「…何で？」

「いや、最近よく一緒にいるとこ見掛けるからさあ」

「うん、つるんでるよ」

俺はそう答えて前を向いた。

こいつ何が言いたいんだ。

「あいつとあんまりつるまない方がいいと思うけどねえ」俺

「あ？」

俺は思わず振り向く。

そいつは黙々と黒板に書かれたのを書き写しながら、さりげない調子で言う。

「あいつは危険だよ」

「は？」

「だってさ、あいつの親、二人とも自殺してんだぜ？なんか危険じやねえ？」

「…え？」

「何、知らねえの？本当にお前って周りのこと興味ねえよなあ。」  
あいつの親、二人とも自殺して何年か前に死んでんの。だから今あいつ女の家渡り歩いてるって噂だぜ？」

そんなの…初めて聞いた。

矢吹からそんなこと一度も聞いたことがなかった。

「あいつもいつキレるかわかんねえじゃん？なんかいかにもって感

じするし、学校の壁黒くしたりもしてるし、なんか頭おかしいよなあ。俺はあんまりそいつと関わんねえ方がいいと思うけど…」

それからもブツブツと何かを言っていたが、さっぱり頭に入らなかった。

でも、俺の中の何かが音を立ててキレた。

ガタガタンッ！！

気付けば俺はそいつの胸倉を掴み、持ち上げていた。

「なっ…何すんだよ…！」

そいつは苦しそうに声を振り絞って言った。

「春木！何やってんだ！やめろ！」

教師の声。

…どうでもいい。

「てめえ、矢吹の何知ってるっつーんだよ、あ？親がどうかどうでもいい。てめえらよりよっぽどまともだよ、矢吹は。本当のことかどうかもわかんねえくせに、デタラメ言ってるじゃねえよ」

「春木！」

教師が俺を押さえ付ける。

俺は胸倉を掴んでいた手を離して、教師を振りほどいた。そして教室から出た。

俺は今どうしてキレたんだ？

友を馬鹿にされたから？

それとも…知っているようで俺は矢吹のことを何も知らないから？

…どうでもいい。

とにかくむしゃくしゃする…。

気付いたら俺は図書室の前に立っていた。

俺と矢吹の部屋。

二人だけの秘密の場所。

いつの間にか、二人部屋になっていた俺の部屋。

それまではずっとここは俺一人の部屋だった。

なにもかも嫌になったとき、馬鹿みたいなこと言う奴にむしゃくしやしたとき、俺はいつもここに来ていた。

ここは俺の安らぎの場所であり、俺が一人になりたいときに来る俺の部屋だった。

でも、いつからかここは一人になりたいときに来る部屋じゃなくて、話を聞いて欲しいとき、同じ考えを持つ人間に共感して欲しいときに来るようになっていた。

矢吹…俺はお前の何なんだろう？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4226c/>

---

矢吹とジェイソンの物語

2010年10月28日07時28分発行